2014年(平成26年) 10月24日(金)
第6111号

厚生福祉

時事通信社

104-8178　東京都中央区銀座5-15-8　時事通信社
昭和28年5月30日　第3種郵便物認可
毎週2回火・金曜日発行(但し祝日を除く)
購読料金　税抜月額4,100円
本誌掲載記事・写真などの無断複写、複製、転載を禁じます。
©時事通信社2014
◎誌面内容に関するお問い合わせ(編集部)
kousei-dokusha@jiji.com

目次

特集　地域包括ケアシステム構築に向けて「理論書」2冊をひもとく……2
障害者の芸術活動、包括的に支援　貸し出しや保存・収集も―京都府……6
事件・事故・裁判……7
30歳女性、実父の子と認める ほか
中央省庁ニュース……8
介護事業、おおむね黒字経営 ほか
進言(長崎県)……9
いじめ認知、小学校11万件　最多、暴力も1万件超す……10
地域を支える(愛知県)……11
社説拝見　9月後期―公的年金運用や待機児童問題など論じる……12
エボラ熱、オバマ政権に批判、二次感染で「対応後手」、中間選挙の争点に……14
私たちの工夫　「既存の会議」を「改善」する……15
調査・統計のページ……16
新刊図書の中から……17
ニュースフラッシュ……18
【福祉・子ども】シニアボランティア1万人突破 ほか【医療・健康】アラーム付き薬入れ無償貸与 ほか【環境・ゴミ】地熱発電用の水道料金設定
スコープ……20

限界

知的障害者施設
堤塾塾長・堤　保敏

打診

私は、古美術、骨董(こっとう)といったものに、全く興味がない。なのに、私の周辺の人たちはそれを信じてくれない。おそらくこれは、私の骨董品的風貌のせいだろうと思っている。

最近、価値が有るのか無いのかわからないが、時代を感じる陶器、家具、掛け軸、はたまた農機具までが「使ってもらえないか」と、よく届く。お人よしの私は「NO」と言えなくて、それらが物置小屋から溢(あふ)れそうになってきた。

夏が過ぎて秋が来たある日、仲間の一人が、

「もう限界ですわ」

と言い残して私たちから離れていった。

知的障がいを持つ人たちと暮らしている私は、彼らの「仕事」として、わずかな農地を耕作している。わずかなのだが私たちには広過ぎて、農地の一部を十坪程の区画に区切って一般に開放し、共に畑の「仲間」と呼びあって、野菜作りを楽しんでいるのだが、この中の一人が「限界が来た」というのだ。

氏は、野菜作りを「こんな楽しいことはない」と言っていたし、頑固なまでに農薬を使わず安全安心野菜作りに徹し切って、「孫の喜ぶ顔が目に浮かびますよ」が口癖だった。

八十才を超えても、ゴルフは現役プレーヤーだそうだ。氏の言う「限界」は体力の限界ではないように思えた。

だが、私は氏に、何が「限界」なのか聞くことはしなかった。直感的に、他人が立ち入ってはならない深い深いところに、突然の離脱の理由があると感じたからだ。

ただ一筋、ほほを伝う涙を見るのが辛(つら)かった。

さまざまな骨董品が寄せられるのは、だいたい私より一回り、二回り年長者からだ。だから、耕作放棄した氏と骨董品所有放棄者に共通するのは、高齢ゆえの「限界」、この二文字なのだ。

畑の耕作希望者は多い。だが、集まった骨董品は所有者には思い出いっぱいの宝物であっても、専門家に言わせれば金銭的価値は限りなくゼロに近い《ガラクタ》ばかりだそうだから、欲しいと言ってくれる人はいない。もうすぐ、わが家の物置小屋の受け入れ能力は限界点に達する。その時私は「NO」と言えるか、それが疑問だ。